

村山知義「死んだ海」三部作

——私たちの「愛情の問題」をめぐる一考察——

鴨 川 都 美

一 はじめに

村山知義は、一九三五年より始まる社会主義リアリズム論争の過程で主張した「発展的リアリズム」の実践を、大凡二十年の時を経て、『死んだ海』（『世界』一九五二・七）において試みた。この実践は、『死んだ海』の第一部となる『真夜中の港』（『世界』一九五二・十二）、第三部の『崖町に寄せる波』（『世界』一九五三・十二）へと引き継がれていった。この「死んだ海」三部作は、村山の戦後の代表作であり、戦後低迷していった演劇運動のなかでは評価されるべき作品であると思われる。また、村山は一九三二年、『志村夏江』（『プロレタリア文学』一九三三・四）を発表した直後に入獄し、それ以降「死んだ海』に至るまで、島崎藤村原作『夜明け前』二部作（『テアトロ』一九三四・一一、一九三六・三）、本庄睦男原作『石狩川』（『テアトロ』一九三九・一一）等、小説の脚色が仕事の中心となり、創作戯曲に着手することはなかった。「死んだ海」三部作は、村山にとっては実に二十年振りの創作戯曲となった作品である。

この三部作は、千葉県銚子市から南へ四キロの外川をモデルとした「田崎」という漁村が舞台である。時は一九五一年から一九五三

年にかけて断続的に進行する。かつてはイワシ漁が盛んだった漁村が、今はアメリカ軍の射撃演習が原因で不漁に喘いでいる。この「死んだ海」が抱える様々な問題——封建制度、船主と船方たちの闘い、「ドカンの補償金」問題、組合運動、家族や恋愛——を、船方の未亡人であるお吉とその娘・君子、漁船従業員組合員の金沢、そしてタヌキ屋（船主の屋号）のエンジ（機関士）の新蔵を中心人物として、つぶさに描き出している。第一部『死んだ海』では、「ドカンの補償金」をめぐる船主と船方たちの闘い、「納屋の者」と呼ばれる船主に住み込みで奉公する若者たちのハンガーストライキを大きく取り上げている。第二部『真夜中の港』では、小船主たちの墮落した実状が語られ、また彼らも追いつめられた状況にあることがわかる。また、「エンジ」と呼ばれる機関士の一人が仕事中に事故死し、それを契機に機関士組合による各船主との賃金交渉が始まり、両者が歩み寄りを見せるまでを描く。第三部『崖町に寄せる波』は、『死んだ海』三部作の中心人物の一人であるお吉の一家を軸に、各々の個人的な問題に焦点を当てている。

村山は「死んだ海」三部作について次のように述べている。

私は日本の労働者階級のたたかいを、しかも共産党員を登場させて描くところまで達した。時は以前とは異なり、文化、芸術の分野でも、統一戦線の時期であり、われわれの創造すべき作品は必ずしも労働者を観客大衆とし、そのテーマも労働者階級のたたかいを描くことに集中せねばならないことはなくなったが、しかし、労働者のたたかいを描き、労働者階級を観客にすることの重要性は相変わらず存在する。²⁾

このように、「死んだ海」三部作は従来、菅井幸雄氏が、「死んだ海」には、わが国の階級構成の縮図をみるように、さまざまな階級の間が登場するが、そのなかでも、とくに注目されなければならないのは、封建的遺制の濃い漁村のなかで、巨大な政治状況と雄々しく、真面目に対決しようとする労働者たちの形象である。³⁾と指摘している通り、「労働者階級のたたかい」ばかりに注目が集まり、その周辺に存在する女たちにはスポットが当てられることがなかったのである。しかし、「死んだ海」三部作には、村山が戦前から抱えていた「愛情の問題」を三人の女たちに託していると筆者は考える。彼女たちに共通するのは、封建的な社会規範から逸脱し、自ら選んだ道を貫こうとするため、周囲の理解を得られずにいることである。また、労働者としての「運動」と、女性としての「愛情の問題」を同時に抱える姿は、戦前のプロレタリア戯曲の集大成となった『志村夏江』の主人公・志村夏江にも見出せる。

本論では、村山の「愛情の問題」がどのようなものであるか確認をした上で、村山が創造しようとした三人の女たちの「愛情の問題」のありようについて検証していきたい。

二 「愛情の問題」への志向―『志村夏江』の系譜として

祖父江昭二氏は、村山が『死んだ海』で描こうとした「愛情の問題」は、戦後の村山の作家的な特徴の一つであり、「共産党員を登場させて描く」という課題に直面した際、ユージン・オニールの『ああ、荒野』の自由翻案として発表された『初恋』（『テアトロ』一九三七・一）に凝集していた愛情による相互信頼や愛情・結婚をめぐる自由意思の尊重にある愚直な人間賛歌を積極的に取り入れることで、重層的な人間像の描出を心がけたのではないかと指摘している。祖父江氏は、村山の「前衛芸術的な発想やマルクス主義のやや機械的な受容によるイデオロギッシュな人間把握等が、この性向」、つまり愛情への性向を『初恋』まで抑え込んでいたと述べているが、筆者は、『初恋』と『死んだ海』三部作で取り上げられる「愛情の問題」とは性質を異にしていると考え、村山がこの問題に取り組もうと試みたのは『初恋』以前、『志村夏江』からではないかと考える。

『初恋』は、舞台を「四国高松」に設定しており、その温暖な気候が登場人物たちに影響しているのか、終始安穏とした印象を受ける作品である。主人公の青年・定次は「あいつが本を読み始めたら地震が来たって動かんわ」と言われる程の読書家であり、両親はどのような内容の本を読んでいるのにか心配はするものの、概ね寛容な態度をとっている。製薬工場の息子である定次と、菓の卸先の娘のようこの恋愛を軸に物語は進んでいくが、ようこの父親が二人の交際に反対し別れさせようと画策して失敗に終わる以外は、取り立てて大きな事件は起こらない。村山は『初恋』について、「これは子

供の戀愛について、封建的ではない、新しい理解を示す親と、子供との關係を取り扱つたもので、ごくおだやかな喜劇なのだ」と述べている。この「封建的ではない」環境のなかで展開される「愛情の問題」は、「死んだ海」三部作の封建的遺制が根強く残る田崎で描かれた「愛情の問題」とは、作品における役割に大きな隔たりがあると考へる。また、村山は前掲書で次のように、「愛情の問題」についての見解を示している。

これ（封建的な家族制度、結婚制度―引用者）は農村には今でも色濃く残つていて、その一掃は容易のことではない。長い間しみ込んだこゝういう封建的な考え方や感情やを追放するためには藝術の力が大きな働きをする。だから、結婚、戀愛などを民主主義的見地から取り扱つた演劇もわれわれはどしどしやらなければならぬのだ。（略）（封建制度下では―引用者）家を超え、主人を超え、身分を超え、はんを超え、國を超えた愛情というものは考へられないのである。そういうわくを超えた愛情を取り上げた演劇をやることも意義のあることだ。

勿論、この「結婚、戀愛など民主主義的見地から取り扱つた演劇」には『初恋』も含まれていると思われるが、「わくを超えた愛情」は、やはり封建的な制度によつて抑圧された状況でこそ表現され得るものではないだろうか。

また、この試みは一九三二年に発表された『志村夏江』で既になされていると考へる。関東平野を囲む山村で育つた「志村夏江」という少女は、満足に教育も受けることができず、安い賃金で働かさ

れ忍従の日々を送っている。夏江の一家は借金の返済のために東京へ夜逃げをし、夏江は工場で働き始める。理不尽な扱いを受けたことに反発して単独でサボタージュを執行した夏江は、その粘り強さを買われ共産党の分会員に誘われる。やがてオルグの男と男女の關係になり、男の一方的な考への押し付けによつて女闘士へと成長していくが、最後には男が解党派であることを批判し、關係を断ち切るのである。女闘士として目覚ましい成長を遂げた夏江であるが、一方で男女の關係についても自らの意見を持つ女性として描かれている。第五章第二節では、同僚のサダ子に次のように語っている。

夏江（略）もし相手を、心から愛していれば、二人がそういう關係になつた場合、たとえどんな問題がおこつてもチャンとそれが階級的に理解できると思うんだ。だけどそうでもないのにそんな關係になれば、きつといろんな問題がいちいち仕事の邪魔になると思うの。

サダ子 たとえばどういふことになるの。具体的に言つてくれないとわかんないわ。

夏江 そりやずいぶんいろんなことがあると思うけどね。（略）たとえば相手の人が刑務所にはいつてるとする―私が心から愛している人なら、どんなことでも犠牲にして仕事に集中できるし、その人も安心していられるし、そればかりでなく、しよつちゅう私のことを考へるたんびに励まされると思うの。

また、子供についても、「子供の問題でも本当に階級的に解決出来るのは二人がチャンと愛し合つている場合だけだと思ふ」と述べて

いる。徳永直『赤い恋』以上』（『新潮』一九三二・一）に見られるように、完全な男性優位で、女性はその道具として扱われることさえあったプロレタリア運動のなかで、女性が自らの考えによって行動していける道筋をつけようと、芸術的立場から創作に着手した村山にとって、「愛情の問題」は「運動」と一対をなすものであったと考える。その二つを同時に描出することによって、観客を運動へと導いていくだけではなく、人間的な成長にも訴えかけていたことが窺える。金親清氏は「九十九里濱點描」（『民衆舞台』「特集号」⁸⁾一九五二・六）のなかで、「村山氏の心をいちばんつよく動かしたのは、ここ（外川―引用者）に根深く残るいはゆる『封建的遺制』の問題と、それから『愛情の問題』らしい」と振り返っている。この「愛情の問題」は、重厚な人間ドラマを描出するために選ばれた単なる素材ではなく、三部作を通じて極めて切実な問題として取り上げられているのではないだろうか。

三 お吉の場合

「死んだ海」三部作には、お吉、カネ子、君子という三人の世代の異なる女たちが登場する。

三部作を通して中心的な登場人物の一人であるお吉は、「タヌキ屋」の船方の未亡人であり、一九五一年の時点で四九歳、「いい顔立ちの、小柄の、細いが弾力的な女」（第一部）として描かれている。三春という町で「親のいうとおりに、むりやり地主の息子」と結婚させられるが、行商の小間物屋の男と東京に駆け落ちをする男と別れた後、「二十四の年から七年間」、「あっちこっちの紡績工場を歩き廻って、組合運動」をしており、その「組合の女闘士だっ

た頃の仇名」は「野バラのお吉」であった。三十歳で田崎に嫁に来たものの、「タヌキ屋」の船方だった夫には先立たれる。しかし、その戒名を肌身離さず持っている程亡き夫を慕っている。また、田崎の主婦の会長を務め、漁船従業員組合書記の金沢敏夫やエンジの代表として船主との賃金交渉をする矢島新蔵と、田崎の未来について対等に話し合いを重ねている。紡績工場を渡り歩いていた当時は、ストライキでずいぶん暴れており、第一部で、三春時代に生んだ頭の弱い息子・定行が納屋仲間のために自発的にハンガーストライキを始めると、涙を流して喜び、徹を飛ばす。

お吉の組合の女闘士としての活動期間は、一九二六年から一九三三年まで。その期間は『志村夏江』の夏江が作品中で活動していた一九三一年から一九三二年までと重なっており、年齢こそお吉の方が夏江より十三歳程年上であるが、活動期間から同世代として見なせると考える。また、お吉は「水呑百姓」の家に生まれ、十八歳の時に「むりやり地主の息子」と結婚させられた過去がある。貧しい農村で育った点でも夏江との共通項が見出せる。ここで重要なのは、お吉は駆け落ちをした男と別れた後に紡績工場で組合活動に参加しており、その活動中の七年間は男性の影はない。夏江も理想を述べてはいるものの、オルグの男と別れた後、「愛情の問題」に直面する間もなく、投獄されてしまう。両者は、「運動」と「愛情の問題」を同時に抱えることはない。

お吉が初めて「運動」と「愛情の問題」に突き当たることになるのは、第三部になってからである。幕開けから、お吉は大腸の疾患のため人工肛門を取り付ける手術をし、入院している。余命四年程と宣告された彼女は、「二着マ」（船主の屋号）の鞆持ちである亀島

の手引きよって、駆け落ち相手であった川見駒太郎との再会を果たす。この再会は、これまでのお吉の態度を一変させ、彼女とって他人事ではなく切実な「愛情の問題」を発生させることになる。川見は「全国股にかけて小間物の行商」をしていたが、「チンドン屋」をやり、現在は「田中町で桔梗屋」という名の「淫売屋」をやっている男である。しかし、この出合いは、実は亡き夫の妹の夫である清水がお吉の家の乗っ取りに失敗し、「清水の住んでいる長崎の鼻の家を貰う約束をしていた」亀島が自分の利益のために、「川見の駒さんを暗闇から引きずり出」すという策略によるものであった。このように仕組まれた再会ではあったが、お吉は「忘れようと骨折って」いた思い出が甦ってしまうのである。そして、残された生命の時間を川見と過すことを強く望むが、娘の君子はその提案を峻拒する。金沢はお吉の境遇に同情し、君子の説得を試みるが、その金沢からみても、川見が本当にお吉に対する「愛情」から同居を望んでいるのではなく、お吉の亡き夫が残した君子名義の家（お吉は三春の前夫の戸籍から籍を抜いてもらえなかったため、二軒の家の名義は君子になっている）を手に入れるためではないかと疑っており、川見と別れるようお吉の説得を試みるが、受け入れられない。結局、川見と別れることもなく、明確な結論を出さず終幕となる。

お吉は、自らの死に直面し、その直後に「愛情の問題」が浮上する。これまで田崎の婦人会会長として築き上げてきた周囲の人間の信頼をも失いかけ、「野バラのお吉」から、簡単にただの「女」へと変貌してしまう。お吉には―大病し余命を宣告されたことを考慮に入れなければならないが―「運動」と「愛情の問題」を相容れることが出来ないことに、彼女の「愛情の問題」の特徴があり、また

それは戦前に創作された『志村夏江』の夏江の現在の姿として、村山が描出した存在であるといえよう。

四 カネ子の場合

お吉を過去の女とするのであれば、カネ子と君子は戦後の新しい女として描き出された存在である。

カネ子は、第一部では「寿司屋の女中」をしており、第二部で新蔵の妻となる。第一部での年齢は二一歳。かつて銚子の「山サ」の女工をしており、組合活動で散々暴れ、「クビになった」経験がある。組合での活動期間は作品内で示されていないが、カネ子の年齢を考慮すると、戦後であると考えられる。金沢からは、「工場労働者の新鮮な血液を漁村に注ぎ込む輸血管」（第二部）と呼ばれ、「寿司屋の女中」をし、そこで得た情報から「船頭も船方もみんな痛切に感じてる問題を取り上げて、それを押し進めることでもって、組合の民主化つうこんもできるんでないかしら。」（第二部）と重要な提言をし、積極的に金沢や新蔵たちの会合に参加していくのである。

カネ子の夫となる新蔵は、雇い主である「タヌキ屋」の船主の笹島の娘・松枝との縁談を持ちかけられるが、カネ子との恋愛結婚を優先し、その話を断ってしまう。同じく「タヌキ屋」に雇われている新蔵の父・健二郎や兄の健一は、松枝との縁談を強く勧めていたため、当然カネ子と新蔵の結婚には猛反対している。周囲の反対を押し切り、恋愛結婚の末に結ばれたカネ子と新蔵は、お吉の「お前たち夫婦も、三カ月の間に、田崎中をすっかり、ひっくり返してしまつたよォ。」（第二部）という言葉からもわかるように、新しい夫婦の在り方を田崎の人々に示していくこととなる。

では、田崎の典型的な夫婦とは、一体どのようなものであったのだろうか。田崎の夫婦とは、「女房は亭主の二十間もあとからついて行く、映画館さへえるのも、亭主がへえつてから二、三分たつてからへえる」(第一部)と金沢が言うように、封建的な関係が根強く残っており、男性は漁以外は何もせず、残りの全てを女性が担わされているというのが一般的である。また、極端な例を挙げれば、「髪を振り乱し、ポロポロの着物を着て」(第一部)いる金兵衛の妻は、夫の金兵衛が消息不明になった後、そのショックで気が変になり、町を徘徊するようになる。周囲の人間たちは、この金兵衛の妻は肯定するが、病気で連れ合いを亡くしたお吉が病気になった際、「今までピンピンしてやがったのが間違」(第三部)いであるとして、お吉を非難するのである。

カネ子と新蔵は、このような田崎の夫婦関係を覆す存在として、周囲の好奇の目にさらされ、家族からも強い反発を受ける。新蔵は第二部で、健二郎からエンジの仕事をやめて一本釣り漁をやらぬかと誘いを受けるが、即答はせず次のように答えている。少し長いが引用する。

新蔵 わかったよオ、父つつあんーカネ子とも相談してみべえ。

健二郎 (憤りと怨みの表情) —ふむ、女と相談しんのかー

新蔵 そりゃそうよ、一家のこんだもんな。女房に相談すんな

あ当り前だべえ。

健二郎 新蔵、お前、田崎中の笑いもんになつてんの、知んね

えのか？

新蔵 何がよオ？

健次郎 しょっちゅう二人でつるんで歩いてつでねえか。お前らが家から出てつたら、近所のもんが皆表さ出て笑つてるから、何だと思つて覗いて見りゃ、何だ、二人で腕なんか組んで、歩つてるでねえか。

(略)

新蔵 アメリカの真似じゃあねえ。世界中どこでもやつてるこつたよオ。やつてねえなあ日本ぐれえのもんさ。その日本でも、女房が亭主の二十間あとからついて行くなつてえのは、この田崎だけだよ。

カネ子は、戦前に組合運動を経験したお吉に代わつて戦後の工場一の組合運動経験者として田崎に新風を吹き込んだだけでなく、新蔵と共に夫婦の在り方にも新たな光を与える役割を担っている。また、田崎の娘たちはその多くが田崎の町を出てしまふ戻つてはこない。残された若い男たちは、恋愛を知らず、「田中町」という色街で性欲を満たしている。恋愛結婚をしたカネ子と新蔵の「愛情の問題」は、このような若い人間たちにも影響を与えていると考えられる。

五 君子の場合

カネ子と新蔵の姿を見て、「いつも『凄いなえ』つてわが意を得たりつつう顔して、よろこんでいる」君子は、「死んだ海」三部作を通じて際立った成長を遂げ、自ら「運動」と「愛情の問題」に積極的に取り組む姿勢をみせていく。君子は、第一部の時点で「十八歳」であり、「二重まぶたにマツゲの長い、目の大きな、きつい顔の娘」である。「編物の夜学」を終えた後、第一部では「英語の夜学」

に通っている。周囲からは、定行の「英語の夜学さ行つてどうするだ？パンパンになる気か？」（第一部）という言葉からもわかるように、勉学への熱意が理解されているとは言い難い。君子の唯一の理解者と言えるのが、組合書記の金沢である。君子と金沢は、第一部で次のようなやり取りをしている。

君子（略）おら「風呂さ行がねえか？」つていう、旦那が「おら、行くべえ」つていう。それで二人で連れだつて行く。それが理想だな。

金沢 そんなことしたら、それこそ田崎中引つくら返つちまうべえさ。大革命だよ。何しろ女房は亭主の二十間もあとからついて行く、映画館さへえるのも、亭主がへえつてから二、三分たつてからへえるつづうのが、田崎の夫婦道だかな。

君子 おら、そんなら大革命をやつてやるべえよ。そうでなきゃ結婚なんてまっぴらだ。あんたどう思う？ーえ？どうなの？

金沢 うんーむろん男女同権絶対賛成さ。原則としてはな。

このような考えを持つ君子にとっては、カネ子と新蔵の姿はまさに理想の夫婦である。また、君子は金沢を慕っており、金沢も君子を憎からず想っている。君子と金沢は、第一部から夫婦となることを前提に登場したカネ子と新蔵とは違い、貧しく封建的な田崎で恋愛結婚をするという「愛情の問題」に挑もうとしている。

しかし、君子と金沢の関係は第三部に至つて停滞を見せる。「房総バスの車掌」となり、組合の運動にも参加するようになった君子

が抱えるのは、「運動」や「愛情の問題」だけでなく、新たに浮上した「家族の問題」である。母親のお吉は余命を四年と宣告され、これまでのように働くことはできない。また、頭の弱い兄の定行は、ヒロポン中毒のため納屋の仕事ができなくなり、更には窃盗罪で逮捕される。一家の稼ぎ手として働くことを余儀なくされた君子は、お吉の「愛情の問題」にも振り回され、金沢に勢いで求婚してしま

う。

君子（略）（ギョツと金沢を見つめて）金沢さん、あんた、おら嫌い？

金沢（狼狽して）え？ー君ちゃんをか？ーどうしてよ？嫌いでなんかねえよ。わかつてるでねえか。

君子 あんた、おらと結婚してくんない？ね、おねがいするわ！

だが、金沢も組合の仕事が疎かになる程生活が困窮しており、その上、君子同様に面倒を見なければならぬ身内を抱え込み、「時々、自分の能力つうもんに、まるで自信がなく」なつた状態に陥っている。金沢は、「おらたちの結婚もなあ、困難な条件の中から、二人だけ逃げ出して結婚する」のではなく、「みんなに協力して貰い、お吉にも「よろこんで賛成」してもらえる状態にしなければならぬ」と君子を説得するのである。

新蔵夫婦が田崎に吹き込んだ新風は、新しい夫婦の関係、男女が平等であり、お互いに喜びや悩みを共有できる関係を田崎に示した。その影響を多分に受けた君子は、自らの意志で恋愛と結婚へと進ん

でいこうとするが、乗り越えなければならぬ問題が山積し、「死んだ海」三部作では君子と金沢の結婚はその方向性を見出せずに終わってしまう。

お吉の次世代として描かれるカネ子と君子は、カネ子は「工場労働者の新鮮な血液を漁村に注ぎ込む輸血管」として主婦の立場から田崎の運動に参加し、君子は第三部で共産党員となり、房総バスの組合運動に参加しながらも、両者は「愛情の問題」を抱え、それらを両立させていこうとするのである。また、君子は「家族の問題」に直面することとなり、第三部では、

君子 今の世の中じゃ女が一人で生きていくためには、いろんなことをしなくちゃなんねえわ。自分でやましくない仕事なら、どんなことだってかまやしない。おらだつてやるわ。それがどうしたの？

というように、強靱な覚悟を持って必死に生きようとしているのである。

六 おわりに

一九三二年、村山知義は『志村夏江』のなかで、一つの可能性を示した。それは、プロレタリア運動に身を投じた女性たちが、一人の人間としてその存在を認められ、男性と対等に関係を築いていくという未来である。しかし、その後二度の投獄を経験した村山が創作戯曲を発表することはなく、二十年という期間を経て―演劇運動が求められる時代からは遠ざかってしまったが―ようやく「死んだ

海」三部作において、その可能性に着手することができたと考える。お吉、カネ子、君子という三人の女たちに課せられた「愛情の問題」は、「初恋」で描かれた対立構造のない、温室のなかで育まれる素朴な愛情とは異なり、封建的な風潮の強く残る貧しい社会のなかで、周囲の無理解や過酷な環境に苦しみながらも取り組むべきものとして描かれている。そして、それは『志村夏江』の夏江の「愛情の問題」にも共通している。また、村山はカネ子と君子という次世代の女たちに、「運動」と「愛情の問題」という二つを同時に抱え込ませ、その両立を図ったことで、自らの意志によって未来を切り開こうとする新しい女の描出に成功している。

「死んだ海」三部作は、労働者の闘いを描いた作品として定説化されているが、以上見てきたように、登場する三人の女たちにスポットを当てることで、村山が求めた「愛情の問題」を一つの大きな軸として、その作品世界が創作されていることがわかるのではないだろうか。

註(1) 「ドカンの補償金」については、『死んだ海』のなかで「九十九里浜の高射砲陣地から海へ向かって実弾演習が、沿海の漁業に及ぼす損害を終

戦処理費から出して補償する金」と説明されている。

(2) 「解説」『村山知義戯曲集』下巻（新日本出版社 一九七一年）

(3) 菅井幸雄『演劇創造の系譜―日本近代演劇史研究』（青木書店 一九八三年）

(4) 「愛情の問題」は、鞆持ちの亀島が君子の相談を持ちかけたお吉に対して、「ほう田崎随一の美人の婿取りの相談けえ？花婿は誰だい？金沢書記かい？愛情の問題（傍線―引用者）なら、わしとこさ一応相談して

貰いてえな。」(第一部)と述べており、また本文中で引用した金親清氏の「九十九里濱點描」でも、「愛情の問題」というように取り上げられていることから、鉤括弧付きで「愛情の問題」とする。

- (5) 鴨川都美「村山知義『志村夏江』の成立」(日本女子大学国語国文学会秋季大会 二〇一〇年十二月四日)において、『志村夏江』は、長年、村山知義が課題としていたプロレタリア戯曲の新しい形式の創造の試みが随所になされている。構成舞台、移動式小舞台、スポット・ライトについての詳細なト書等、プロレタリア戯曲の可能性を模索した結果、従来のような内容のみにこだわった戯曲から芸術的に大きく前進することに成功し、『志村夏江』直後に検挙され、入獄し、転向声明を発表した村山にとって、この戯曲が戦前の集大成となる、と発表した。

- (6) 祖父江昭二「村山知義『死んだ海』」(『20世紀の戯曲 現代戯曲の展開』所収 社会評論社 二〇〇二・七)

- (7) 村山知義『農民演劇論』(若狭書房 一九四七・六)

- (8) 『死んだ海』上演(一九五二年六月二日―二七日 読売ホール、スミタ劇場)の際のパンフレット。

- (9) カネ子と君子の年齢は三歳差であるものの、既に女工として働き、組合経験のあるカネ子と、まだ学生の身分である君子とは、世代に隔たりがあると考える。

(付記) 本稿の作品の引用は、『村山知義戯曲集』上・下巻(新日本出版社 一九七二)に拠った。

受贈雑誌(三)

近代文学試験論	広島大学近代文学研究会
クロノス	京都橘大学女性歴史文化研究所
群馬県立女子大学国文学研究	群馬県立女子大学国語国文学会
芸文研究	慶應義塾大学芸文学会
言語表現研究	兵庫教育大学言語表現学会
神女大国文	神戸女子大学国文学会
高知大国文	高知大学人文学部国語国文学研究室
稿本近代文学	筑波大学国語国文学会
語学文学	北海道教育大学語学文学会
國學院雜誌	國學院大學
国語学研究	東北大学文学部国語学刊行会
国語国文学研究	熊本大学文学部国語国文学会
国語国文学報	愛知教育大学国語国文学研究室
國語國文研究	北海道大学国文学会
国語国文論集	安田女子大学日本文学科
国語と教育	長崎大学国語国文学会
国語と教育	大阪教育大学国語教育学会
国際日本文学研究集会会議録	国文学研究資料館
国文学	関西大学国文学会
国文学研究	早稲田大学国文学会